



(スペシャル・インタビュー)

取材・文・木村紀子 写真・中島隆之

Text by NORIKO KIMURA photographs by TAKAYUKI NAKAJIMA

協力・株式会社学習研究社

大垣書店

大槻ケ子

学生時代、ひたすら暗く地味だったという少年は、バンドを組んで過去のトラウマと戦うべくマイクに叫ぶ。高木フーをおちよくりながらも人生とは何なのさと問いかけて、気がつけば少女たちに追いかけられながら人気街道を駆け昇る。アイドルか、はたまたカリスマか。決めるのは周りであって彼ではない。だから少年は少年のまま、ほんやり自分の影の行方をながめてる。

大槻ケンヂ、27才。筋肉少女帯ヴォーカリスト。

夜中の2時にね、電話するんです。彼女のうちに。
でもって言うの。“オレとUFOの話しよう！”って。
そりゃだれだってイヤですよね夜中にUFOの話なんか。
結局、そのコにはふられちゃいましたけど。

マジであればあるほど、真剣であればあるほど、ときとしてそれがギャンクと受けとられてしまう時代である。

筋肉少女帯の音に一度でも耳を傾けたことがあるならば、彼らがそんな時代の落とした子であることがわかるはずだ。アマチュア時代から数えると結成してすでに10年、おとし5月にリリースした7枚目のアルバム「エリーゼのために」では、ハードロック、バラード、マーチと彼らがお得意とする変幻自在のメロディラインと、そしてそれにかぶさる大槻ケンヂのパワフルながら曲によってまったく印象の違うヴォーカルが、ドラマチックに冴えわたる。

生きるとは なんなのさ
教えておくれよコックリさん

必聴の名曲「ソウル コックリさん」での絶叫は、必死であるがゆえのおかしさを漂わせた彼一流の質実剛健なジョークであり、筋少は何をやっても立派に筋少であることを教えてくれたのであった。そんな大槻ケンヂ、一昨年あたりから音楽活動を離れたところでの活躍が目立つ。マイクをヘンに持ちかえて発表した「のぼはん雑誌帖(のおと)」
「リンウッドテラスの心霊フィルム」
「新興宗教オモイテ教」ほかコラム集や詩集、小説は好評を博し、たちまち彼は「ノ書きヴォーカリスト」となる。またテレビのほうで数々のバラエティ番組に出演したかと思えばNHKにも登場し、UFOや怪現象を科学する。彼のキャラクターはここぞこころへくると変化する。昨春秋、京都は大谷大学へ講演会

のため訪れたオーケンをつかまえた。

「最近、講演会に呼ばれることが多いんです。で、何をしゃべろうかといういる考えるんだけど結局はついついUFOの話になっちゃう。慕ってるんですよ、UFOに。だけどもね、凄いでしょお客さんの引き具合が(笑)。もうシーンとしちゃって。ファンの子に『大槻さん、私はわざわざUFOの話を開きに来たわけじゃありません』なんて言われるんです。でも今まで3回講演会やって3回ともUFOの話をやっちゃった。え？今回の京都ですかアラン、よかったですよ。みんなスーッと引いちゃいましたから(笑)」

彼のUFO好きはじつとに有名である。その昔、最初のバンド名も「キャトル・ミューティレーション」か「フラックメン」にしようか思っていたらしい(何のことかわからないひとは矢追純一の本を読むように)。その日、「UFOは存在するか」から話は始まり「笑点」における三遊亭円楽・宇宙人説」までとび出し、実際には爆笑のうちに終わった講演会だった。

「このもの頃から不思議なことが好きでしたね。いわゆる超常現象。そんな本はつかり見てました。でもある時点からこれって本当のことはかりじゃないんだとわかってきて。最近では幽霊や超能力を信じる信じないという次元を越えて、すべて合理主義的にもつとを見るのがおもしろいなと思うようにな

ったんです。つまり常識では考えられないようなことも、敢えてフツーのこととして解釈してしまおうと。例えばね、僕小さい頃に幽霊を見たんですよ。僕小さい頃に裏道があって、そこは夜になると真暗。いつも怯えながら通ってたんだけど、あるときそこにある「ランコ」の上に首が乗ってたんですよ。男の生首。落武者っていうのかなあ。ほんと怖かったですよ。でもこれを合理主義的に解釈してすべて頭の中のことと考えると、つまりその頃から僕の中の中に潜んでいた罪の意識という(笑)。いつもこのことを悲観的に考えるのがクセになってたもんで、すべてそんな精神が見せた幻だったのではないかと」

子供時代から暗かったんですよ(笑)。「いつも悪いほうへ悪いほうへ考えてしまつ」と。トレードマークとなったヘアスタイルにマイク。真つ赤なコスチュームのでたちの彼からそんな言葉がこぼれるといささか不似合いな気もする。著書の中でも「日本ロック界においていちばん気の小さい男」と自らを茶化す。常にスポットライトを浴びている者の気負いが彼にはまったくくない。現在の人気も「キャーキャー言われるとそれはそれでうれしいですけど。でも所詮、感情の高まりというものは持続しにくいですから」と。だからといって、特別冷めているというわけでもない。それよりもちよこちよこ垣間見せるのは、とまどいがちな少年の顔だ。

「最近つくづく、僕って結婚しないだろうなあって思います。恋人がいても飽きちゃうし。とろとろしたのがいやなんです。付き合っていると言いつつなんかに来たがるでしょ。僕は自分の仕事場に女の子が来るのは好きじゃない。僕って恋人と会いたいと思うときがめったにないですよ。ふつと世間一般で恋人同士というのはお互いしよっちゃう会いたくなるものらしいんだけど僕はない。彼女とは遠くにあって思うものとするって考えますから(笑)。もともとひととコミュニケーションをとったりするのが苦手なんです。疲れちゃう。たとえば10人の女の子とデートする機会があったとしても、その中で話が合う子は一人もいないくらい。なあんでカワイイなと思ってても会話がかわかないの全無。だめだこりゃなんて思っちゃう。恋の予感があってもいざ付き合つとなると、電話したり、デートしたり、ケンカしたり、誕生日にはプレゼントしたり、あーいろいろやんなきゃと考えると、もうイヤでも嫌でたほうがいいや、なんてね」

これは冷静なのかはたまたまポーズか。そつといつも、年末のテレビ番組「芸能人ねるとん」ではマルシアとくつしたオーケンであるが、ダチヨウ倶楽部のメンバーがそこらじゅうを走りまわって大ボケをがましめる中で、風貌が一番ハデながらも憲武に「意外と硬派ですねえ」とツッコまれるあたり、シャイなのではある。

今、いろんな本が書きたくていっぱい構想を練ってるんです。もっと時間があれば、ほんとにたくさん本を書きたいなあ。それと売れる本！ドカーンと売れないでしょうかね、このへんで

「女優で「オールディ・ホーン」っていますよね。彼女って好きなんです。もう結構年なんだろうけど、いつも自分を可愛く、きれいに見せようって一生懸命なところがとってもいいなと。映画はよく見ますよ。最近で見た映画はウエイン・スワールド。それとジェイコブスラダー。これがもう、いやな映画でねえええ。ほんつとにいや。ベトナム戦争から帰ってきた男がいるんだが、幻覚に悩まされて、何が現実だかわからなくなるといふ筋なんだけど暗い話で。何を間違えたか、よりによってレイトンジョーで見たが、よりによって、それもお客が8人(笑)。

落ちこみましたよ。ビデオで映画は見ません。必ず映画館。なんか見た気がしないんですよビデオじゃ。気が散っちゃって。でも僕って映画を見てる、途中で違うストーリーが頭の中に浮かんできちゃうんです。で、勝手にそっちにストーリーが進んでいくの。最後には映画じゃない自分で考えたほうの話に感動してね。うん、ええ話やーなんて泣いたりするんですよ。だからいい映画ほどちゃんと見れないの」

彼自身もいくつかの映画出演を経験している。今ほとんどのミュージシャンはなんとAVにも出たことがあるという。「レンタルでは見れません。買ったんですけど(笑)」というオーケンだが、タイトルは「女教師の下着」。そして彼の役どころは男子生徒で、役名は「ロック野郎」だ。やってくれろ。

まあそれは別として、以後「ファンシィダンス」、「バーロー」、「ワルン

ムストーリー」など話題作への出演が続いている。役者・大槻ケンヂの未来とはいかがなものか。

「役者はもついいです(笑)。演技は苦手です。話があってもお断りしたい。よっぽどしからみでもない限り(笑)ここで聞いて聞いていたスタッフ何故が大爆笑、僕は映画に出ません/ジュンスカのカズヤくんのほうがずっとウマイです(笑)」

なんと突然の演技拒否宣言である。しかしここ最近音楽活動よりも個人のパーソナリティにより注目が集まっているオーケンのこと、映画のみならずテレビ番組への出演も多い。

「去年の秋くらいからかな、テレビの仕事が増えたしたのは、出ようと思ってるわけじゃなくて話があったから、最初は何ごとも経験だと思って。でもテレビって難しいですね。そもそも人間にはハムレット型とドンキホーテ型があって、僕はどちらかといえばハムレット型。つまり優柔不断と自己矛盾の中で生きていくという(笑)。逆に、

自分はこのだとハッキリしたボリシーがあるひとがドンキホーテ型。テレビにはドンキホーテ型のひとのほうが向いているんじゃないかな。僕ってテレビに出るたびにキャラクターが変わっちゃうんです。相手が何を求めているのかわからなくて困ってしまってますよ。だからこれからは「ロコモーション」の時だけ出させてもらってですね、そ

のほかの時間はできるだけ本を書きたいと思ってるんです」

新しく出版された本「行きそんで行かないとこへ行く」(学習研究社)はオーケンの旅行記風エッセイである。彼がいるいるな場所(彼自身が選んだ文字どおり行きそんで行かないところ、だ)をふらり、訪れる。浅草ストリップでオーケンというところの、「おヌードをちよつだい」したり、通天閣のビルケンさんの像を仰いでその浪花根性になんか感動したり、尾道でさびしんぼうしたりと、全編にノホンが漂う。

「今度の本はね、内容的には中学生ぐらいよりも即座以上のひとのほうがよくわかるかもしれない。うん、楽しめるかも。でももちろん、みんなに読んでほしい。今いろんな本が書きたくていっぱい構想を練ってるんです。もっと時間があれば、ほんとにたくさん本を書きたいなあ。それと売れる本/ドカーンと売れないでしょうかねこのへんで」

近頃はSF小説、そして少女マンガの原作なども手がけた。しかし筋少ファンとしては、これからのバンドとしての活躍も非常に気になるところである。

「僕の変化とバンド自体の変化は微妙に違う。それは仕方ないことだと思っんです。(歌詞の中に)「死」というテーマが多いのではないかとこの質問に対して(笑)別に死ぬことに憧れているわけではないです。むしろ生存本能のかたま

り(笑)。僕のこれからの歌詞としては、より自己分析的なものが多くなっていくと思えますよ。何故自分はこう思っのかとより追求してみようかと。でも基本的に何でも起こったことは運命として受け入れようと思ってるんです。いわゆる「E.T.」「B.E.T.」でやつです。でもとも信じてやつがないんです。だから言うこともすくすく変わっちゃう。でも結局、僕自身は変わらないですけどね」

筋少の詞に頻りに登場する、リュックに子猫をいれてバクタンで世界を吹き飛ばそうと夢見ている少年。それを彼とするならば、握り締めたバクタンは決して破壊を欲するがためのものではなく、つまるところ、悩みながらも「人生とは何なのさ」と常に問いかけるがゆえの武器なのである。

オーケン、これからどこへ行く。「実は今度のアルバムで、大槻ケンヂ、ロック界進出っていうのを狙ってます(笑)。僕らってこういうわけがロック雑誌に載ったことないんですよ。もしかしてミュージシャンとして扱われてないのかなと。やんなっちゃうんですよ。だから、ねえ書いてきてくださいな。オーケン、なんとロックに挑戦、次のアルバムでロック界進出！」



大槻ケンヂ

P・R・O・F・I・L・E

本名 大槻賢二

1966年2月6日生まれ

東京都出身

82年 筋肉少女帯結成

インディーズのナゴムレコー

ドより「高木ア一伝説」を発表

88年 「11月伝説」でメジャーデビュー

を果たす

89年 ラジオ「オールナイトニッポン」

水曜1部担当

90年 映画「ファッション」出演

その他バンド活動のかたわらDJ、俳優、執筆など幅広く活躍中